

自然 自然とともにこちよく生きるまちすいた

今、吹田を取り巻く環境は必ずしも良好とは言えない。

吹田を南北に分断する高速道路、汚れた河川。ビルが乱立し車の途切れることのない商業地。

今現存するみどりさえ開発に脅かされる。

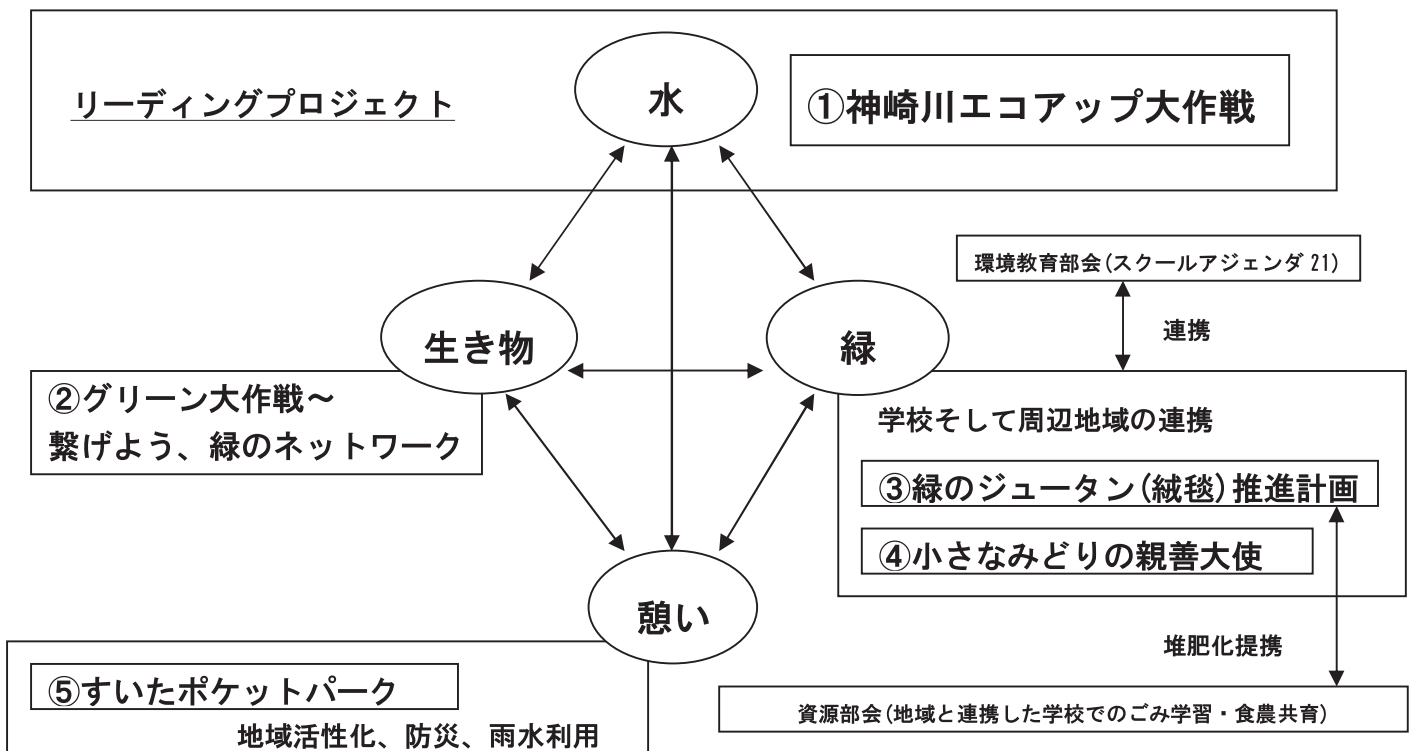
しかし、どの場面にも、そこで生活し暮らしている人がいる。生き物がいる。

人にとって住みやすい街は生き物全てにとっても住みやすい場所に違いない。

みどりが増え、川には魚が泳ぎ、子どもたちの歓声が聞こえる。

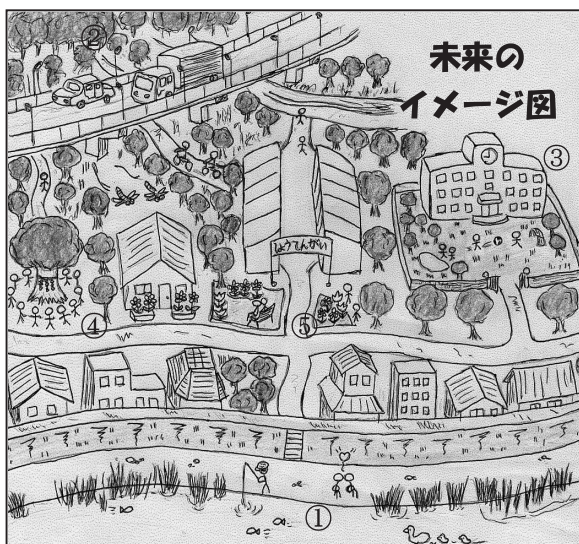
こちよく暮らせる場所には、憩いを求めてさらに人が集い、生き物が集まる。

これが私たちのめざす「自然とともにこちよく生きるまちすいた」です。



自然

自然部会のプロジェクト関係図



キーワード	水、生き物、緑、憩い
プロジェクト	①神崎川エコアップ ②グリーン大作戦 ～繋げよう、緑のネットワーク～ ③緑のジュータン(絨毯)推進計画 ④小さなみどりの親善大使 ⑤すいたポケットパーク

自然部会はこんな未来をめざしています。

神崎川エコアップ大作戦

～子どもから高齢者、そして恋人達が寄り添える活気ある懐かしい場所に～

○ 目的・効果

【主たる目的】 神崎川の護岸や水辺のエコアップ

【波及的効果】 神崎川周辺の活性化

○ 誰（と誰）が〈主体〉

「推進組織」、市民、商店街、自治会、事業者、行政

○ 誰（と誰）に〈対象〉

神崎川、市民、事業者

○ 何をするか〈内容・手法〉

1. 「神崎川エコアップ推進組織」の立ち上げ

「推進組織」が、地域住民、商店街、NPO、すでに神崎川河畔で活動している企業のネットワークなどに呼びかけて「神崎川エコアップ推進組織」を立ち上げる。

2. 「神崎川エコアップ推進組織」の活動

(1) 神崎川に関心を高めるイベントの企画・実施

神崎川での不法投棄釣り、路地裏探検ツアーなどの実施

(2) 神崎川マップづくり

神崎川の昔の姿や今の姿、利用の仕方などの基本情報を把握しマップにする。

(3) 神崎川エコアップ計画づくり

① 自然環境の創出

自然に配慮した神崎川護岸の整備、地域在来種を考慮した水辺の自然環境の再生、「わんど」の創造、子どもの冒険遊び場などを検討する。

② 神崎川へのアクセス空間の整備

環境に配慮した商店街の活性化や旧市街地の魅力を活かした神崎川へのアクセス空間の整備（路地園芸の奨励、雨水タンク、ポケットパークなど）

3. 今後の展開

商店街、事業者とともに、賑わいのある「ニュー・エコ・ウォーターフロント空間」（注）の創出を目指す。（屋形船なども）

（注）河川環境に配慮し新しくお洒落だが、どこか懐かしく古さや情緒を活かしたウォーターフロントのこと。

○ 活動の期間

1年目：エコアップ推進組織の立ち上げ

2年目：イベント企画・実施、マップ作り

3年目～：計画づくり

○ 予算〈概略：収入と支出〉

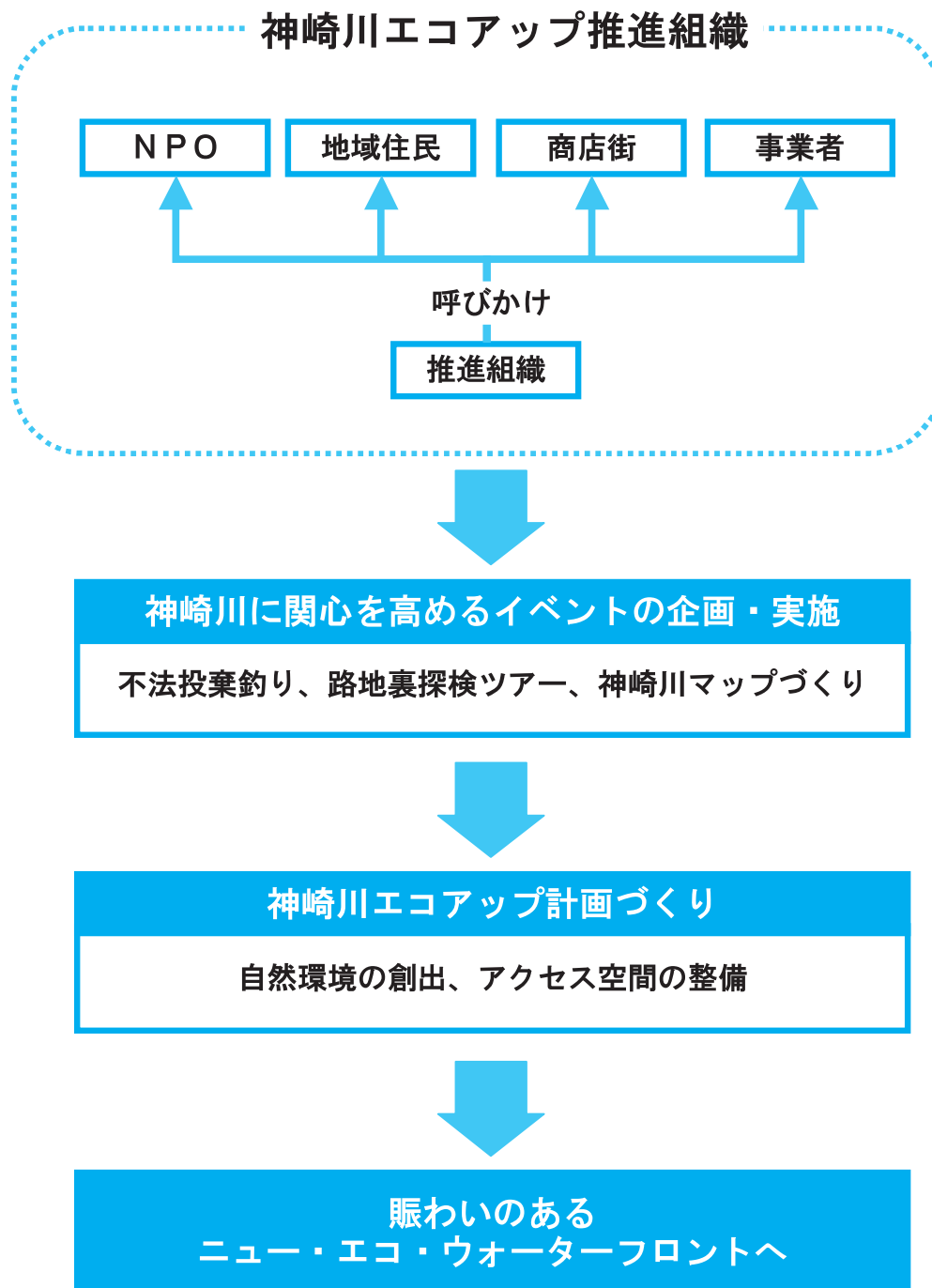
支出：エコアップ推進組織運営費用、
イベント企画運営費

○ 評価の基準

・エコアップ推進組織参加者、団体数 ・イベント参加者数

・神崎川のエコアップ度（生物の種類、水質） ・神崎川への愛着度 ・関係者間の連携度

■ プロジェクト概要図



緑のジュータン(絨毯) 推進計画

○ 目的・効果

【主たる目的】学校の校庭・オープンスペース・公園の緑化、ヒートアイランド現象の緩和
子ども、高齢者、生き物に至るまで楽しく安心して使える場所の創造

【波及的効果】市民ボランティアの組織化、学校のネットワーク化、環境学習の推進

○ 誰（と誰）が〈主体〉

市民、子ども、NPO、企業、「推進組織」、
行政

○ 誰（と誰）に〈対象〉

市民、子ども、生き物

○ 何をするか〈内容・手法〉

1. 「緑のジュータン推進協議会」の立ち上げ、「モデル校」の選定
市民、NPO、学校・PTAに呼びかけて、「緑のジュータン推進協議会」を立ち上げ、モデル校を選定する。
2. 調査
モデル校に「緑のジュータン推進委員会」（生徒、教師、PTAなど）を設置し、学校敷地の動植物調査、校庭の利用調査などを行う。
3. 計画づくり
 - (1) ビオトープ整備計画
動植物調査をもとに、地域在来の動植物を呼び込むためのビオトープ整備計画づくりを行う。
 - (2) 校庭緑化計画
校庭の利用調査をもとに、校庭の芝生化などの校庭緑化計画づくりを行う。
4. 計画の実現化
子どもと大人が楽しみながら調査、計画づくりに携わり、自分達でできる工事（植物を植えたり、池を掘ったり）なども業者と連携しながら行い、計画を実現させ、管理運営も担う。
5. 今後の展開
学校を拠点に派生的に地域全体に整備対象を拡大する。（街区公園など）

○ 活動の期間

- 1年目：推進協議会の立ち上げ、モデル校選び
- 2年目：調査、計画づくり
- 3年目～：計画の実現化

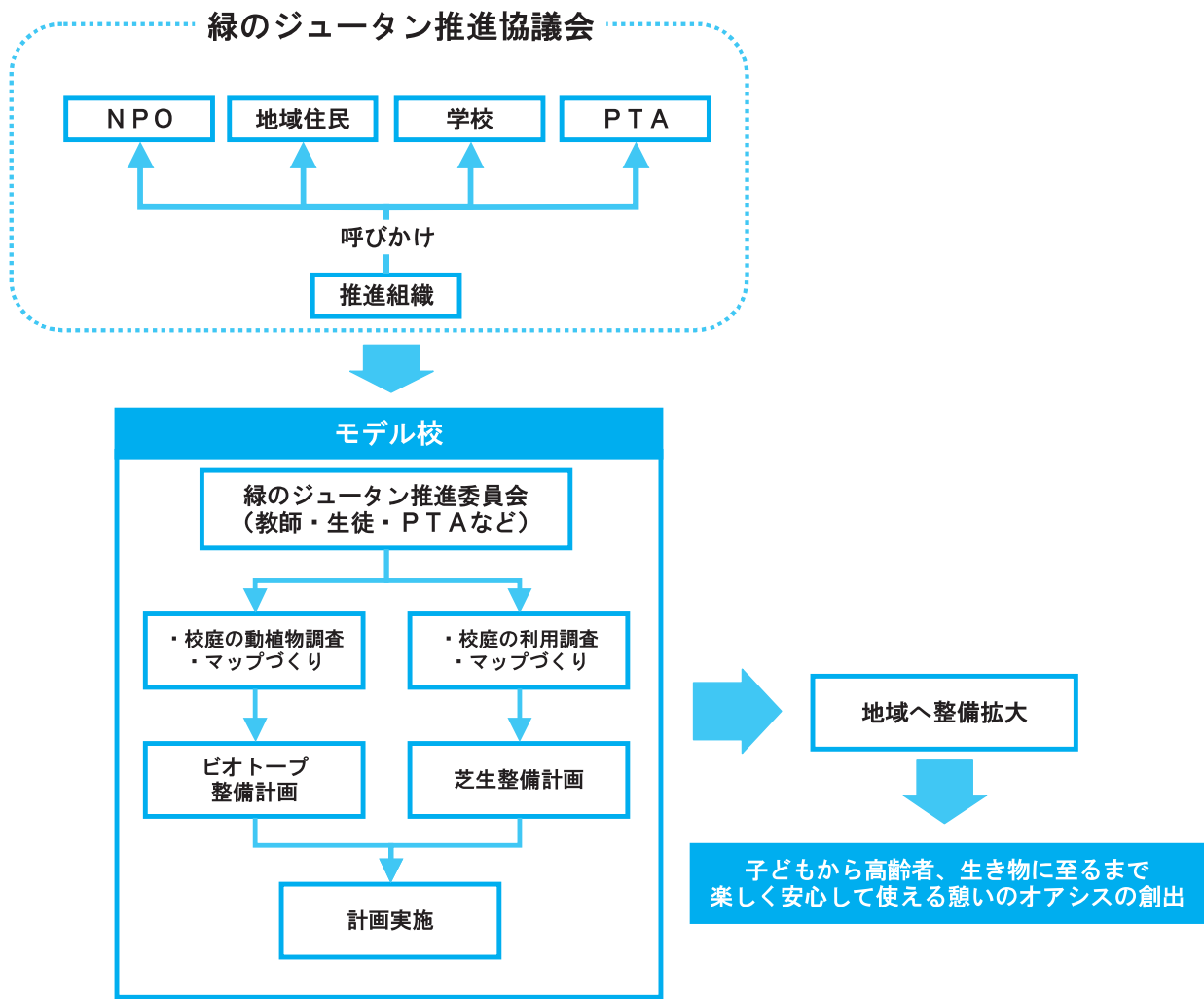
○ 予算〈概略：収入と支出〉

支出：会議運営費

○ 評価の基準

- ・学校の緑地率
- ・校庭や公園に生息する生物の種類
- ・協議会、委員会参加者数
- ・関係者間の連携度
- ・学校への愛着度（利用形態含む。）

■ プロジェクト概要図



自然



グリーン大作戦 ～つなげよう緑のネットワーク～

○ 目的・効果

【主たる目的】吹田市北部と南部をつなぐ緑のネットワークづくり

【波及的効果】温暖化防止、ヒートアイランド現象の緩和、動植物の保護、環境保全グループの連携

○ 誰（と誰）が〈主体〉

「推進組織」、市民、事業者、行政

○ 誰（と誰）に〈対象〉

市民

○ 何をするか〈内容・手法〉

1. 「緑のネットワーク推進協議会」の立ち上げ、モデル地区の選定

「推進組織」が、市民、環境保全グループ等呼びかけ「緑のネットワーク推進協議会」を立ち上げ、モデル地区の選定を行う。

2. 北部と南部をつなぐ緑のネットワークづくり

名神高速の下をくぐる道または河川敷、トンネル部分の上にあたる箇所として、まずは「紫金山」「関西大学敷地」「糸田川」の3ヶ所に注目し、ここを拠点として「緑のネットワーク」づくりを進めていく。

3. 「緑のネットワーク」づくりプロセス～計画策定から管理運営まで～

(1) 「緑のネットワーク推進協議会」が呼びかけ、さらに広く参加者を募り、上記の候補地を「緑の抜け道」とするため計画策定連続ワークショップを開催する。

(2) 実施工事については、インフラ整備の部分は業者が携わるにしても、植栽工事などは関係者も参加し、完成後の管理運営にも積極的に取り組んでいく。

(3) 「緑の抜け道」が完成した際には「環境掲示板」を作成する。

「環境掲示板」は、「緑のネットワーク推進協議会」が管理し、環境をテーマにした話題を掲載し、その場所で見つかった動物の写真などを掲載する。

○ 活動の期間

1年目：協議会の設置

2年目：計画づくり

3年目～：計画の実現化

○ 予算〈概略：収入と支出〉

支出：会議・ワークショップ運営経費

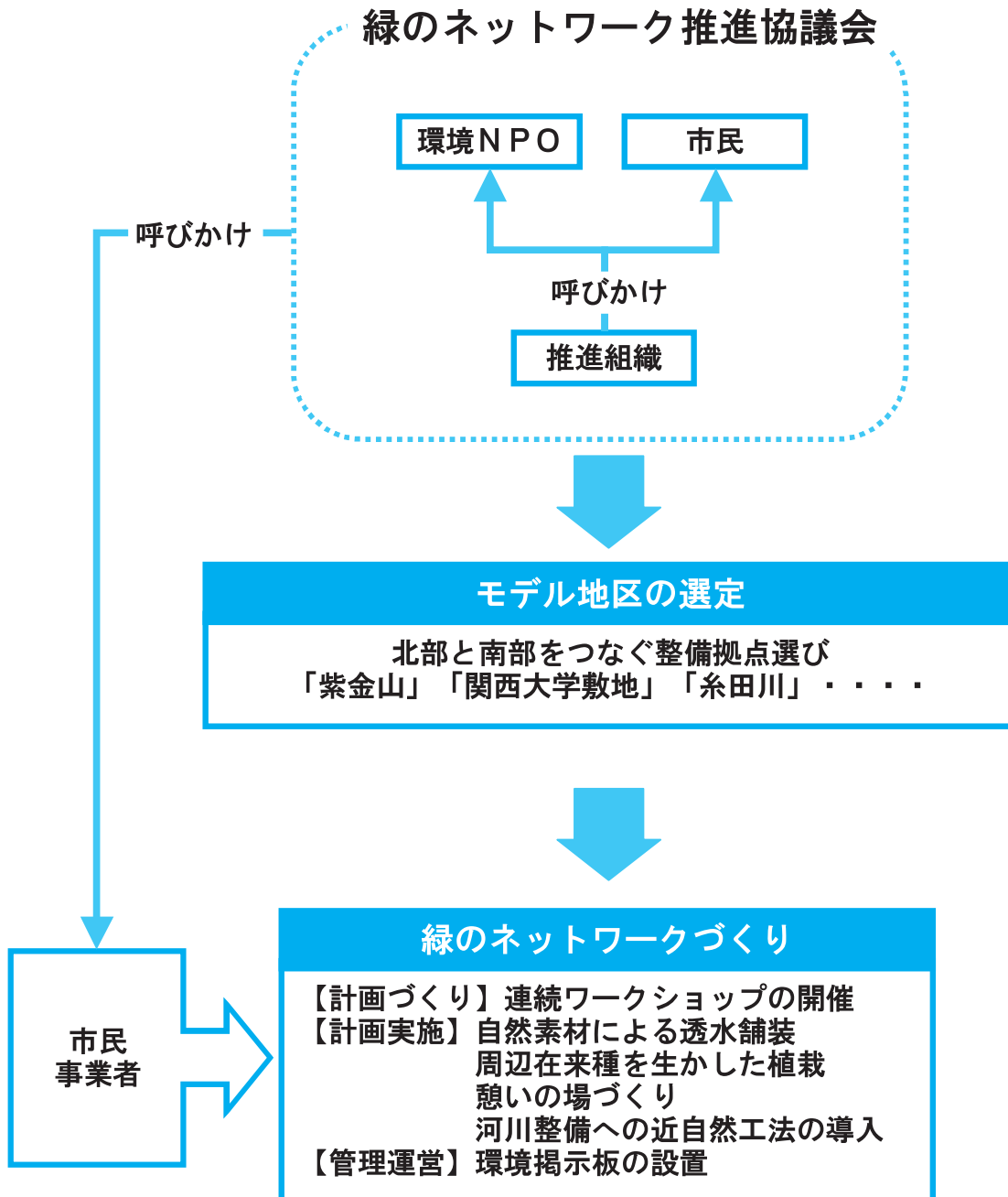
改修工事費用、維持管理費など

○ 評価の基準

・協議会参加者数 ・ワークショップ参加者数 ・関係者間の連携度

・吹田市南部地域のエコアップ度（緑化、生物の種類） ・「緑のネットワーク」への愛着度

■ プロジェクト概要図



小さなみどりの親善大使

○ 目的・効果

【主たる目的】子どもたちの環境活動の推進

【波及的効果】子どもたちの活動を通じた大人の環境問題に対する意識の向上

○ 誰（と誰）が〈主体〉

「推進組織」、子ども、大人、NPO、行政

○ 誰（と誰）に〈対象〉

子ども、大人

○ 何をするか〈内容・手法〉

1. 「小さなみどりの親善大使推進協議会」の立ち上げ

中学校単位の地域で、地域の子ども団体、地域住民、環境NPOなどに呼びかけ、「小さなみどりの親善大使推進協議会」を立ち上げる。

2. 「子ども大使」の募集

「小さなみどりの親善大使推進協議会」が地域の子どもを対象に「子ども大使」を募集する。

3. 「子ども大使」の普及活動

(1) 町のエコチェックや生きもの調査

自分が住んでいる以外の地域を歩き、その地域が抱える環境問題を子どもの視点から捉え、解決方法を考えたり、環境NPOなどの支援を受け、生きもの調査を行う。

(2) 子どもパパラッチ大作戦

「吹田の環境」というテーマで、吹田の良いところや悪いところを写真撮影し、写真大会を開催する。

(3) 生きもの調査

環境NPOなどの支援を受け、生きもの調査を行う。

4. 「子ども大使」の本格的展開

(1) 「小さなみどりの親善大使推進協議会」の活動を各地区に広げる。

(2) 普及活動で把握した問題を「推進協議会」メンバーの協力のもと、子どものアイデアを生かし、みどりを増やし、自然を活かす具体的活動に移す。

(3) 定期的に交流会を持ち、各地区の「子ども大使」の活動を評価しあう。

(4) 活動を担った子どもたちがリーダーとして、新しく参加する子どもたちの指導に当たる。

○ 活動の期間

1年目：子ども団体や環境NPOへの呼びかけ
推進協議会の立ち上げと大使募集

2年目：普及活動開始

3年目～：本格的展開開始

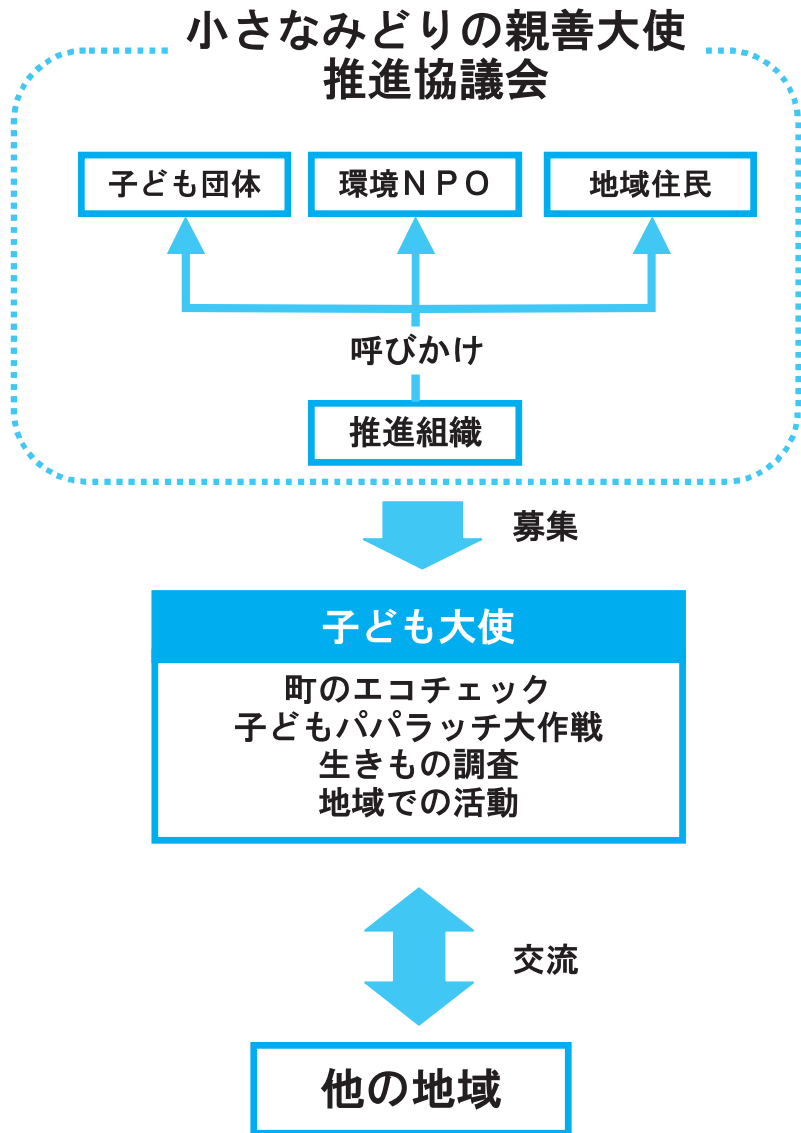
○ 予算〈概略：収入と支出〉

支出：活動費

○ 評価の基準

- ・子ども大使数
- ・小さなみどりの親善大使推進協議会設置数
- ・関係者間の連携度
- ・リーダーになった子どもたちの数
- ・活動の種類と活動数

■ プロジェクト概要図



自然

すいたポケットパークプロジェクト

○ 目的・効果

【主たる目的】公園や空き地のエコアップ、誰もが憩うことのできる交流の場の創出

【波及的効果】地域の活性化、防災、ヒートアイランド現象の緩和

○ 誰（と誰）が〈主体〉

「推進組織」、市民、環境 NPO、事業者、行政

○ 誰（と誰）に〈対象〉

市民、事業者

○ 何をするか〈内容・手法〉

1. 「推進組織」と環境 NPO による公園や空き地などの現状調査
みどりが少ないといわれる吹田市南部を中心に現状調査を行いマップにし、データベース化。
「小さなみどりの親善大使」の活動とも連携して進める。
2. ポケットパークとして再生する公園や空き地の候補地リストアップ
3. リストアップされた場所の周辺住民や所有者へのヒアリングと合意を経て、再整備箇所を決定
(土地の取得・借用に際しては、固定資産税の減免措置など所有者へのインセンティブを検討)
4. 「推進組織」と周辺住民、関係者による「ポケットパーク再整備実行委員会」の立ち上げ
5. 「実行委員会」による再整備ワークショップの開催
 - (1) 地域住民や環境グループの積極的な参加を得て、再整備計画を策定。
 - (2) 整地や排水などのインフラ整備は業者が行い、植栽、遊具・ベンチ、プランター、ガーデニング、池づくりなどは「実行委員会」をはじめ市民も行政も汗をかく。
 - (3) 散水設備については、雨水や井水、再生水を利用し、ヒートアイランド現象の緩和や防災に役立てる。

○ 活動の期間

- 1 年目：現状調査、候補地の選定、
「実行委員会」立ち上げ
2 年目：ワークショップ、計画づくり
3 年目～：工事の実施と運営維持管理

○ 予算〈概略：収入と支出〉

支出：会議・ワークショップ運営経費、改修工事費用、
維持管理費など

○ 評価の基準

- ・協議会やワークショップへの参加者数
- ・ポケットパークの整備数
- ・参加者間の連携度
- ・ポケットパーク及び地域への愛着度（利用形態や利用者数）
- ・地域のエコアップ度（緑化、生物の種類）

■ ポケットパークのイメージ

